

部落問題学習指導案（全体学習：公開授業）

1994年11月25日（金） 5校時

2年E組 指導者 吉成 正士

1. 主 題 誇り得る「ふるさと」であるために
2. 主題設定の理由

4月8日、私は2年E組の担任として本年度を迎えることとなった。始業式、家庭訪問、授業参観と、常に同和教育を視点に置いて自らのこの教育にける思いや願いを、これまでの取り組みを交えながら、また事務処理に追われながらも語っていく取り組みをしてきた。その中で今までに感じてきたことは「みんな人間として生まれてきて、やはり人間としての純粋な生き方を求めているんだな。それは生徒たちだけでなく、保護者も求めているんだな。」ということであった。その一端を紹介すべく、主題設定の理由を綴っていきたい。

※

学年が始まった当初、やはり今年も「峠」の詩で学級開きをおこなった。この詩の本当の意味は、月日が経てば経つほど、また厳しさを積み重ねれば積むほど身にしみて感じてくる。そんな中で、部落問題をまだ深くは理解していないが肌でこの問題の重要性を感じとり、表現しようとするのだがまだ発表という形で表せない者が、その切なく苦しい思いを記録ノートに綴ってくる。

※

『“昨日の自分より今日の自分が好き”今日の自分は憎らしいぐらい自分が好きになれなかった。どうして思いを口にさせないんだろうか。私は右の手を挙げようとしても、手が固まっていた。家に帰って、なぜか涙がこぼれそうになった。なんか息がつかまった。一生懸命思いを伝えている子がいるのに、なぜ私が後に続いて意見を言えないのだろうか。頭の中に考えていることがたくさんあった。私は口に出して伝えていきたい。思いを伝えたい。誰かに思いを伝えて分かってもらいたい。小学校6年生の時は、部落問題学習をやらなかった。いつとも体育ばかりしてた。たまにやっても、先生がいつとも一人ひとり当てていった。自分から手を挙げて発表することはなかった。そんな自分に甘えた気持ち、今でも残っている。当てられたら言おうという気持ちが……。そんな気持ちをなくしたい！口に出して言いたい。今の私は文に書くだけしかできないのだろうか？私はそうは思わない。絶対手が挙がると思っている。私にとっての峠は、今の気持ち乗り越えて思いを伝えること。峠を乗り越えて新しい自分になること。今年1年間努力して、変わっていききたい。1年。1年。この1年で変わりたい。この1年で自分の気持ちを伝えていけるようにしたい。』

※

「峠」の授業を繰り返していく中で、それぞれの生徒が自分にとっての「峠」を見つけだしていく。中には、前の文章のように部落問題学習に関わって今までの自分を振り返る者も多くできた。それは私の意を汲んでできてきたものであるかもしれない。しかしきっかけは何であれ、自分を見つめる機会になれば、それがスタートになるのである。まずスタート地点に立たねば、1歩目は歩めない。スタート地点に立つかどうかである。その意志があるかどうかである。

参観授業の時、一人の女子生徒が決意を込めた手を挙げ、小さな、しかし気迫に満ちた声で、訴えるように呟いた。

「差別はどうしたらなくなるんですか。誰か教えてください。」

本人を含め誰も予想だにできなかった発言であった。この問いかけはクラス全員の心を揺さぶった。そしてそれまでの重苦しい雰囲気をおち破った。このことは、実はみんなが抱いていた思いなの

である。誰もが自分自身のどこかで問いかけきたことなのである。しかし、なかなか正面から体当たりすることができないでいたのだ。みんなが求めていたのである。誰もがスタート地点に立ちたかったのだと痛烈に実感した。

※

『今日の授業の最後のほう「私も言わなきゃ」って思って必死になって言うことを考えて書いた。書き終わって何度も見直しをして……。そんなことをしている間にも手を挙げればいいものを……。あれこれやっているうちにNさんが手を挙げた。私はその発言にびつくりした。泣いている。

「差別はどうしたらなくなるんですか。誰か教えてください。」

という発言が胸に突き刺さった。私だって差別なんかしたくないのに……。言うことも考えずにスッと手が挙がった。あの時私の口から出た言葉は心の中から出したもので「ここで発表しなきゃ、友だちとして失格だ」という思いが手を挙げさせたから、言う言葉なんて本当に考えていなかった。初めてきれいごとばかり並べていた自分から離れたような気がする。それもみんなNさんのおかげだ。私は嬉しかった。この前の時間みたいにじゃなく、たった1回でも手を挙げられたことが。本当にたった1回だが……。

全体学習で、私は1回だけ手を挙げたことがある。5回もあってたった1回だけど。手を挙げる前は、ドキドキして、青ざめて、すう〜とお化けが出てきた時みたいに手を挙げた。先生が私を当てた瞬間、何もかもが吹っ飛んだ。紙に書いたことだけを、ただスラスラと読んだ。それだけだった。マイクを置いて座った時に「うれしい。言えた。」と思ったが、すぐにそんな気持ちも吹き飛んだ。「これでいいのか……。本当にこんなのでいいのか……。？」紙に書いてあることをただスラスラ読んだだけ。こんなので全体学習に参加したって言えるのか……。結局そのまま終わった。2回目の発表もしないうちに……。「こんなのでいいのか？」私は後になって後悔した。』

※

「この学年は、特に発表をしない。」と言われてきた。我がクラスも御多分にもれず、おとなしいクラスだと言われていた。確かに学年によってカラーはある。だからといって個々に持った思いすらもないものだろうか。そんなことはない。そう感じた「峠」の授業であった。事実部落問題学習を続けていくにつれて、今まで秘められてきた様々な思いがポツポツと表面化してきたのである。

※

『今日「学習会に行つてつらい。」という子がいた。僕も6年の時つらいと思うことがあった。それは、親から「お母さんとお父さんは、部落差別のために結婚するん反対されたんよ。」と聞かされて「僕も大人になったら結婚できんのかなあ。」と思ったことでした。でも今はそんなことは思っていない。もしそんなことになっても、その人を変えていけるようにしたいです。』

※

『私は学習会に行っている子に「頑張つてきーよ。」の一言だけでいいのかなと思っていました。もっとみんなが喜ぶ言葉はないのかなと思ってました。そのことを聞くために、私は今日の部落問題学習の時、1回だけ発表しました。でもI君が「頑張つてきーよつて言ってくれたとき、涙が出るほど嬉しい。」と答えてくれました。その時あらためて分かりました。どこにでもありふれている言葉だけど、その一言がやる気につながるんだと。嬉しかった。今日の学習で、この学習がもっと好きになった。』

※

『私は、もう1度差別のことを聞いてみて知りました。私は本音をすべて言うことができません。

でも1つだけ言えます。私には身内がありません。お父さんの方です。お父さんは4人兄弟なのに……。でも私には、これだけしか言えません。』

※

『前から不思議だったのが、部落という言葉……。それは昔私たちの地域が差別されていたから。でもちゃんとした地名があります。同和地区、同和地区言われるのはいやです。一体私たちや昔の人たちが何をしたと言うのですか！私たちの何が悪くて差別をするんですか！差別する汚い意識を洗い流してきれいな心になるには、みんなの協力が必要なのです！』

※

やはり人間として生まれてきて、当然思いはあるのである。では、なぜ「特に、発表しない」とまで言わせてきたのか。「言わない」「言えない」原因が、この学習を重ねていくうち少しずつ明らかになってきた。そこには、過去に体験した悪質なじめによる友だち不信。最初に記した生徒を初めとして、今までの部落問題学習との関わり方。部落の生徒たちのあやふやな立場の自覚の起こされ方。そんなことが重なり合い、いつのまにか本心を語り合うどころか、人間として生きていく中で大切な何かを見失っていったように感じる。当然我々教師の姿勢そのものも問われている。

今のクラスには先に述べたことも影響し、様々な立場の子がいる。部落差別をまだ深くは理解していないが、繰り返し繰り返し発表という形でつながっていかうとしている部落外の者。またそれがまだ発表という行動であらわせない者。過去に自分が受けた切ない思いを部落差別の問題と重ねて頑張っている者。部落差別が身近な所にあるということに気付いてしまい、苦悩する者。部落の人間であるという自覚はあるのだが、実際は何をどうしていいかわからない者。自分が部落の人間であるということがわかっていながら、頑張り切れていない者。など、書き出せばきりが無い。そんな中で、自らの体験や取り組みを記録ノートに記してくる者が相次いできた。

※

『明日書くって書いてあったことを書きます。』

塾に月曜日行って、そこにいっばい先生いて、ある一人の女の先生が「どこの中学校？」ってきいてきたから私が「板野」って言ったら、おびえるような目で私を見た。それから「ふーん」と言って過ぎ去って行った。なんかそれから胸がドキドキするし、その人を見る度に自分が恐くなった。あの目を思い出すと、喉の奥がつまってしまう。思い出したら、キューンと痛む。5時間目の授業を聞いてふと思い出しました。涙が出るかと思った。凄く恐いです。そんな事気にするなんて思っても、凄く気にしてしまいます。私はなかなか発表することもできないし、なんかほんと自分でバカだと思う。先生またこんなプリントください。たくさんください。勉強していつみんなに意見を言える自分になりたいから……。まだ自分の気持ちを文でしか言えないなんて……。けど、月曜日のこと文でもいいから伝えられて良かったです。ほんととは24日の所に書いてたけど、ドキドキして、見る度に思い出し、全部消してしまいました。あの目は一生忘れんと思う。なんでなんだろう。あの時言い返したらよかった。私は負けたんだ。何も言えなかったんだ。逃げたんだ。つらい、つらすぎる。腹が立つ。自分に腹が立つ！次の時会ったら一言言いたい。言いたいけど恐い。また余計に変な目で見られたらって思うと。けど逃げたらいいかん。逃げたくない。あんなおばさんに負けたくない！』

※

人はよくイメージでものを言う。住所を聞けば、その町が持っているイメージで判断し、話をする。「東京」と聞けば、なにかしら都会っぽく感じ「徳島」と聞けば、なにかしら田舎っぽく感じる。それは確かにそうなのだが、常にそういう図式が認められるかという点、そうではない。

にもかかわらず、その判断をごっちゃにしている人が多いのだ。「板野」と聞けば「悪い」という凶式を持っている人も少なくないのではないだろうか。それは「板野」だけに限らず、もっと他にもあるかもしれない。しかし果たしてそれでいいのだろうか。そのイメージは真実なんだろうか。そのことに触れねばならないのではないだろうか。「自分はそんなことない」と言う人もいるかもしれない。しかしそれなら何故私の目の前に毎年前述のような文章がいくつも書かれてくるのだろうか。「いい加減にしてほしい」「２度と聞きたくない」というのが私の本心だ。しかし後を断たない。だからこそ私は「わが町を誇りに思う生徒を育てよう」「どんなことがあってもわが古里に背中を向けることのない生徒を育てよう」と思った。「もしわが町を否定されても力強く胸張って対抗することのできる心の力をつけさせねば」と思った。しかしそのためには、私たち自身の中にあるわが町のイメージを明らかにしておかねばならない。もし悪いイメージがあるのであれば、その根源を突き止めておかねばならない。そしてその根源に関わっていく中で、その悪いイメージが人として認められるべきことなのか、そうでないのかを吟味しておく必要が絶対的にあると思うし、根源が何故生まれたのかということについても理論的に突き止めておく必要があるように思う。そのことを徹底的にしないと、同じ町に住みながら、今まで共に肩を叩き合った仲間でありながら、その仲間を裏切るということになってしまう恐れがあるからである。それは、絶対にしてはいけない。させてはいけない。目に見える隣人を恨むのではない。目に見えない差別こそを恨むのだ。

※

『……祖父と祖母が母に言っていました。「部落の子とは遊ばされん。」祖父と祖母は元学校の先生です。学校の先生がこんな間違っただけの考えをしていたら、教えられる生徒はたまったものではありませんね。これでは部落と名乗ろうにも名乗れなかっただろうと思います。本来なら名乗れない雰囲気先生が、友だちが話せるようにしていかなければいけないのに……。』

※

『……前に母との間でこんな話し合いがありました。「絶対部落の人と結婚したらあかんじよ。」「なんで?」「別にあんたが結婚するんはいいけど、ねえちゃんやが結婚できんようになるけん。」その時は「あーほうなんか。」と思ったけど、今考えると凄くおかしいことだと思います。だから私は母や父にこういう間違っただけの考えをしないように話し合っていきたいです。』

※

『今日私のお母さんに、なかなか言えなかったことを言いました。
「私が部落の人を好きになったらどうする?」
「その時はその時。お父さんと相談しな。」
相談しようと思ったけど、仕事でいなかったので、聞けませんでした。
「もし私が、その部落の人と結婚するって言ったらどうする?」
「ちよっとなあ……。」
「ちよっとなに?」
「まあ、二人で考えな。」
「ほな結婚していいん?」
「二人で考えな。」

やっぱり部落の人と結婚してはいけないのでしょうか?結婚してはいけないなんておかしいと思います。

「お母さんが部落を知ったんはいつ?」

「結婚してこっちに來たときじゃ。むこうでは(母の郷)部落やなかったけん、全然知らんかつ

た。高校の時友だちが『あの子って部落じよ』って言ったときふーんとか思わなかったけど、ちょっとドキッとした。」

と言いました。私はもっと子どもの頃から知ってもらいたかったです。そして部落という言葉が出てきたら、すぐになんでも言えるお母さんになって欲しいです。このことを言うのに、凄く勇気がいりました。

私は母とケラケラ笑ったり、楽しく暮らしているので、聞こうか聞かないか迷ったけど、聞きました。聞いて後悔なんかしていません。本当に聞いてよかったと思っています。今日聞けたおかげで、次に聞くときには、もっと楽に聞けると思います。』

※

お父さん、お母さんのことは、本当はみんな好きである。おじいちゃん、おばあちゃんのこと、もっと好きである。そんな大好きな父母、祖父母が差別者として豹変した姿は誰も見たくはない。しかし、それでも差別者としての姿を見ることがある。子どもにすれば、それはたまたまなくつらい。どうして説得していいのかわからないし、絶望もする。次の言葉が思いつかない。そしてそのまま、壁にぶつかったまま、闘うことを忘れてしまう。なかには、別の場へ闘いの場を移したり、愚痴を言うようになってしまったりする。本当の解放実践へと結びついていけないのである。生徒自身その方向性を求めているのである。だから、我々教師は方向性をはっきりと示す必要があるし、力強く腕組み取り組んでいく必要があると感じる。

この学習を続けていく中で、胸を張ることも顔を上げることもできず、学習会に後ろ向きであった生徒や学習会に参加すらできなかつた生徒が、水を得た魚のごとく目をキラキラさせるようになってきた。「こんなにも人は変わるものか」とあらためて思うほどであった。次に挙げる二文は、1学期初めと終わりの頃と同じ生徒の記録ノートである。まるで魔法にでもかかっているかのように、意識が180度変わってきている。さらなる飛躍を期待しないではられない。

※

『……この学習をすると、いつも泣き出す子がいます。私はそんなつらい思いをする子を見たくないので、この学習は正直言って嫌いでした。でもそうやってこの学習から私は逃げていました。これから私はこの学習から逃げないように、みんなと頑張っていきたいです。……』

『今日、私は部落の人間だということを話しました。学習会に行くのを親に反対されています。クラスでも私と同じように反対を受けている子がいます。なんで反対するのかなって思います。私たち部落の子らが学習会で頑張らなくて、誰が頑張るんだ！と思いました。……中略……今日家に帰って「学習会行ったらあかんの？」ってお母さんにきいたら「行かんでいい。なんでほんなん行かないかんの。」っていう答えが返ってきました。言い返そうと思ったけど、言葉が出ませんでした。お母さんたちみたいな人生を送らせたくないんだったら、学習会に行かせて欲しいと思いました。何回言っても無駄なのかな……。』

※

そして最後に、部落民であるということを充分に自覚して頑張りたいのだが、頑張り切れない位置に置かれている生徒について少し記しておきたい。

5月に修学旅行を終わらせ、少し落ち着いた6月に校内部落問題意見発表会があった。その前に選考会として第2学年だけで発表会の時間を設けた。当然そのための原稿を生徒たちに書いてもらったのであるが、学年だけの発表会に2Eから2人を選んだ。その内の一人が彼女であった。

※

『私は部落の人間でありながら、学習会に行くことをすごく親から反対されています。だから、いまだに学習会へは1回も顔を出していません。前にそのことで親に相談してみました。話すき

っかけとなったのは、吉成先生が記録ノートに「学習会にきてみませんか？」と書いてくれたことからです。なぜ両親は私を学習会へ行かせることをいやがっているのか、母に聞いてみました。そしたら、「差別を受けている者に対して、負けるな、強い心をもてって教えるのも大切やけど、私からしたら、本当は差別をする立場の人に、差別をするなってもっと呼びかけていく方が大切なん違うかなって思う。」と言いました。確かにそれはそうだと思う。けど……。けど、吉成先生の言うように、それじゃあ私は一体何をすればいいんだって思いました。いつまでも人に頼りっぱなしでは、部落差別はなくならない。部落民と呼ばれている私やが、先頭に立って呼びかけていかなかったら、何にもならない。そう思います。またそうしていく中で、必ず新しい仲間が増えていくはずです。全体学習であの重苦しい雰囲気動かしていける人たちのように、私以上に頑張っている人たちだってたくさんいます。

ところで、母がなぜあんなことを言ったのかというと、いろんな差別をその身で体験しているからです。若い頃仲のよかった友だちが、高校に入って初めて自分が部落であることを知り、ショックで行方不明になっています。また大学では面接で、「おたくは部落ですね。」と言われ「はい、そうですが……。」と応えると、「わかりました。お帰りください。」と言われたそうです。結婚も「部落だから……。」というだけで、何人かダメになったこともあるそうです。祖父といえば、自分が部落の人間であるということが、ばれては逃げ、またばれては逃げて、徳島から大阪まで逃げとおした人です。やっぱりそういう立場に置かれたら、あんな考えをもってしまふのだろうか？私はこれから先もずっと、このまま何もせずに生きていくのか？と思いました。けど、私はそんなことは絶対にいやです。闘わずに生きていくのは1番いやです。だから、私も学習会に行き、もっともってそういうことを勉強していきたい。そしてまた今日も親に「学習会に行かせて」って頼んでみようと思います。今の状態では、当分行かせてくれそうにもないけど、できれば卒業するまでに、たとえ1回でも、学習会に参加したいと思います。』

※

大勢の前でこの原稿を発表するということは、すなわち部落民宣言をするということである。

「やはり保護者の理解を得ておかねば。」と思い、前夜電話で簡単な説明をした。しかし折り返しかかってきた電話は、怒りの電話であった。

「どうして区別をするのですか。どうして色分けをするのですか。どうして部落の子をピックアップするようなことをするのですか。どうして十三、四の子が差別の矢面に立たされなければならないのですか。かわいい我が子が差別を受けることは、親にとっては生身を引き裂かれるような思いなんだということがわかりますか。学校がそういう姿勢なら、明日は発表させません。学校にも行かせません。」

と突きつけられた。親の子に対する思い……。それが私にはわかっていたのだろうか。私は矢もたてもたまらず、自らの思いをさらしていった。

「……生徒が矢面に立つのであれば、我々教師は、さらにその前に立たなければならないんだ。今我々教師集団がしようとしていることは、そういうことなんだ。全ての命は大切にされ、尊敬され、輝かなければならないんだ。……」

そんなことを要を得ないままそれこそ必死に訴えていた。いつしか涙がこぼれていた。そして、いつしか心穏やかになっていった。それから、様々な話をしてくれた。自分自身も高校時代、部落解放に向け、火の吹き出るような活動をしていたこと。しかし社会に出て露骨な就職差別に出会ったこと。結婚の時にも部落差別に悩んだこと。部落の仲間が差別によって切ない人生を強いられたこと。育児に追われ、また抗う手だてを得ることのないまま、いつしか若かりし頃の部落解放に向ける熱い思いを見失っていたこと……。

「今のままでは、子どもは胸を張ることもできませんね。私たち大人が頑張らなければならないんですよ。昔の熱い思いがよみがえってくるようです。先生、明日発表させますからね。頑張らせますからね。先生も、本当に頑張ってくださいね。」

私のおしゃべりのため、延々その電話は2時間近くに及んでいた。しかし、私にとってその感覚は一瞬であり、なおかつ凄く充実したひとときであった。その後も、いろんな思いが頭の中を駆け巡り、床に就いてもしばらくは眠ることができなかった。そして次の日の学年発表、また校内発表と、立派に発表を繰り広げ、第2位に当たる優秀賞を得ることとなった。またそれと並行して、お母さんから私に一通の手紙が届けられた。

※

『先生のような方々と出会えたことがたいへん幸せであることを娘も私も喜んでいる次第です。今までいろいろと差別されたことなどは、同情を引くようで切々と訴えるのはとてもいやだったのですが、聞いてほしかったのです。真剣に聞いてくださった先生に対する甘えかもしれません。あれほど私自身をさらけ出したことは、学生時代以来あまりなかったのですが、今は娘にできる限り語り継いでいきたいと思っています。子どもたちがどこまで消化できるかは不安ですが、きっと理解してくれることを信じて、子どもたちとこの問題に体当たりで取り組んでくださる先生方に心からエールを贈りたいと思います。娘や先生方がくじけそうになった時は、今までの苦労を思い出し、頑張り続けてください。どうぞこのまま中途半端で終わらせないでください。先人たちがどこかでくじけて逃げ出してしまったように……。

きっといつかは晴れて堂々と「ふるさと」が言える日がくることを信じています。ほしいものはありません。ただ、皆同じ赤い血が流れている人間だということを、わかってほしいのです。』

※

本資料は、ご覧の通りこの一連の出来事をもとにしたものである。私は「ふるさと」とは、本当は陽の当たる表にさらけ出して輝くべきことでありながら、周囲の差別意識に、また自らの差別意識に押し潰されて輝かすことのできていない、もしくはできていなかった大切な大切なもの。自分の全てとまではいかないにしても、自分の本性を示す核心であるもののように捉えている。そんなものを、今のクラスの生徒たちが気兼ねなく語っていける新たな第一歩にしていけるように本主題を設定した。

※

この指導案を作成中のある日、私がある授業の前に歌いながら手話を交えて「夢をあきらめないで」を歌った。するとある生徒が「11月25日も歌を歌ってから授業ができないだろうか」と言ってきた。しかし事は難題である。全校生徒・教職員、それに当日参観に来るであろう県外の方々併せて1000名にもなるような中で歌うのである。即、学活が行われた。歌うのか、歌わないのか。歌うとすれば何の歌を歌うのか。全員一致で歌うことにはなったが、その後に出てきたものがカタカナの曲ばかりで、私にはほとんど分からなかった。横目でみていた私もさすがに不安で、半分頭を抱えていた。「生徒が決めた事だから尊重してやろう。しかし……。」と思っていたところで最終決定となった。決定曲は「サライ」。当時その曲を知らなかった私は「なんだそれは……？どんな曲だ？」と、その時すでに諦めていた。しかしそこからの生徒たちが素晴らしかった。私の怪訝そうな顔を見て、ある者は歌の説明をしに来る、ある者は音楽の先生に歌詞のコピーをもらいに行く、またある者はたどたどしく歌い出す……。そして追いうちをかけるように私が「サライとはどんな意味か？」と聞けば、ある者は国語の先生の所へ行き辞書をひく。ある者は英語の先生に聞きに行く。またある者は意味を知っている友だちがいるらしいという情報を聞きつけ奔走する。そんな中で少しずつ不安が取り除かれつつあったときに、歌詞のコピーは届け

られた。その歌詞を見て、私はしばらく金縛りにあったような感覚さえ覚えた。私が11月25日に授業ですつもりであった「ふるさと」の詩に、重なるものだったからである。そのことを打ち明けながら、生徒の前で必死に「ふるさと」について話をした。そういういきさつがあって今回「サライ」を歌うことになった。是非ともその歌声を聞いていただきたいし、また是非とも共に合唱していただきたい。

※

長々とこの「主題設定の理由」を綴ってきたが、私は毎年取り組んでいるこの全体学習の「指導案・主題設定の理由」を生徒たちに読んでもらっている。4月8日から今までに何度となく訴えてきたことを再確認の意味でも、また「私はこんな思いでこの全体学習に挑むんだ」という決意を表明する意味でも、この文章を読んでもらうことは凄く大切だと思っている。我が「ふるさと」を自らの思いに重ねてより多くの者が奮い立ってくれることを心から願っている。

3. ね ら い

今もなお社会に残っている不合理な差別を「ふるさと」や丸岡さんの詩、「母より」の一言一言を通して再認識し、本当の人間としての生き方がどうあるべきかを自らに問いかけながら、あらたなる第1歩を力強く踏み出そうとする意欲と実践力を身につけさせる。

4. 学 習 計 画

(1)これまでの学習

- ・学級：部落問題学習「峠」（真壁 仁）……………3時間
- ・学級：部落問題学習「母の願い」（全同教福岡大会より）……………2時間
- ・第1回全体学習 「母の願い」（全同教福岡大会より）……………2時間
- ・学級：部落問題学習「学習会の友」（板野中学校3年団自作資料）……………2時間
- ・第2回全体学習 「学習会の友」（板野中学校3年団自作資料）……………2時間
- ・学級：部落問題学習「私の目を見て！」（土方 鉄）……………2時間
- ・第3回全体学習 「私の目を見て！」（土方 鉄）……………2時間

(2)本時の学習

- ・学級：部落問題学習「ふるさと・母より」（丸岡 忠雄・自作資料）……………3時間
- ・第4回全体学習 「ふるさと・母より」（丸岡 忠雄・自作資料）……………2時間(本時1/2)
- ・学級：部落問題学習「ふるさと・母より」（丸岡 忠雄・自作資料）……………1時間

(3)これからの学習

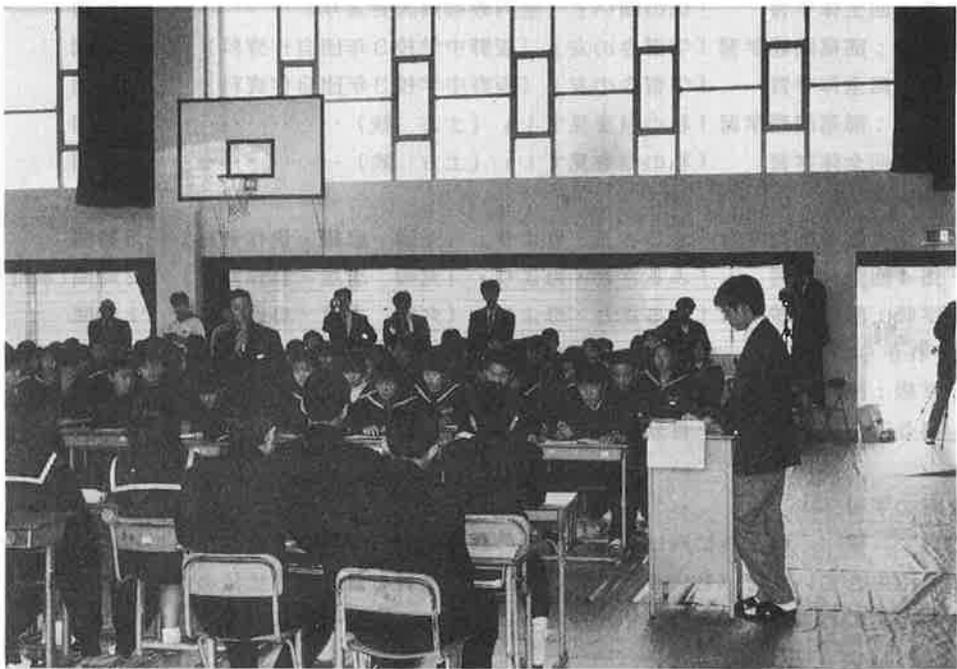
- ・学級：部落問題学習「自分以下を求める心」（佐藤 文彦）……………2時間
- ・第5回全体学習 「自分以下を求める心」（佐藤 文彦）……………2時間

5. 本時の学習

- (1)目 標 私たちに向けられた父母の願いは先人の願いであり、その根本には自分もより良く生きていきたいという強い思いがある。それを自分の内に秘めた思いに重ね、一人の人間として力強くかつ誇り高く生きていこうとする決意へと高める。

(2)展 開

主 要 発 問	指 導 上 の 留 意 点
<p>1. これまでの学習を振り返ってみましょう。</p> <p>2. ではみなさんの父母をはじめとした先人はみなさんの未来にどんな願いを抱いてきたのでしょうか？</p> <p>3. それではそんな父母の願いも含め、私たちの心の中にある「ふるさと」とは一体何なのでしょう？</p> <p>補助（自分自身の「ふるさと」を輝かすにはどんな生き方をせねばならないのでしょうか？）</p>	<ul style="list-style-type: none">・ できる限り多くの生徒に発言させる。・ 人として真実を求め続ける生き方が新しい未来を切り開いていくのであり、弱さゆえに社会に惑わされてきた先人をも変容していく決意を持たせる。・ 「ふるさと」が単に住所をさすのみならずそれぞれの心の中に秘めている大切な思いであるということにまで言及する。・ 一人の人間として命輝かす生き方を力強く求めていく決意をさせていく。・ 着実に部落解放への道のりは進んでいるがまだ不完全であるので、今まで先人が歩んできた以上の闘いを、次は私たちが担っていくんだということの認識をさせる。



2 E 公開授業（吉成教諭）